「日々の理科」（第 1859 号）　2019,-8,11

「8 月 7 日の浅間山の微噴火（３）」

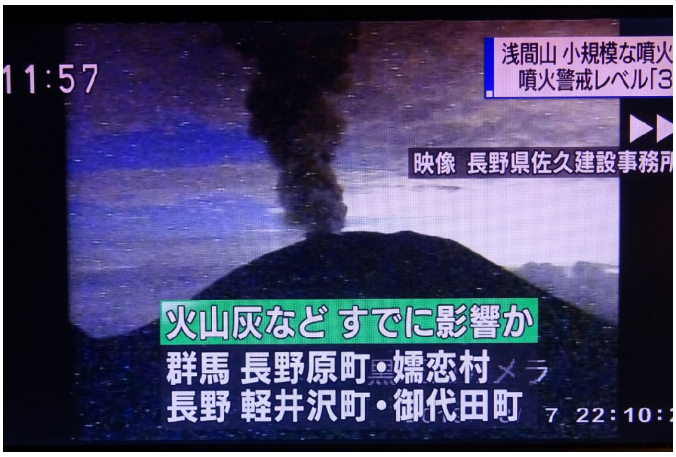
お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

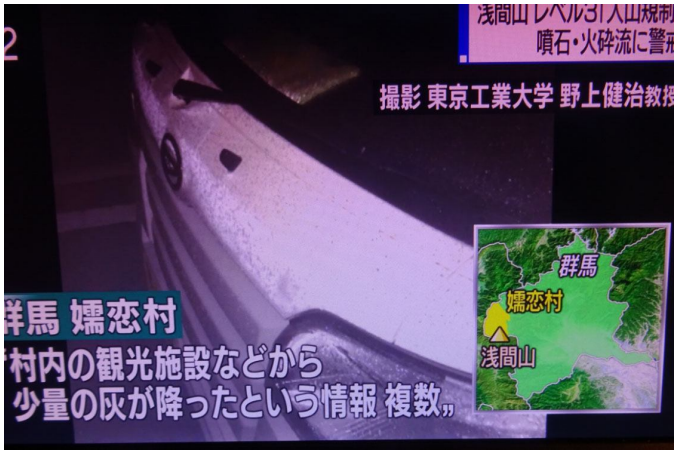
田中　千尋　Chihiro Tanaka

浅間山はなぜか夜間に突然噴火することが多い。2004 年の噴火、2009 年の噴火、そして今回の噴火もいずれも夜間に発生している。

テレビでは、すぐに速報が流れた。これは翌日のものだが、当日もだいたい内容は同じだった。私の山荘では衛星放送しか受信できないが、NHK-BS でも噴火の情報は流れていて助かった。「小規模な噴火」「噴煙が火口から 1800m 以上」などのテロップが放映されている。気象庁の基準では、「火口から固形物が水平あるいは垂直距離でおよそ 100 － 300m の範囲を越したものを噴火として記録する」となっているので、今回のものは、間違いなく「噴火」に相当する。しかし、火山性微動などの前兆現象は、噴火数分前まで全く観測されず、2009 年の時のように「予知」はされなかった。

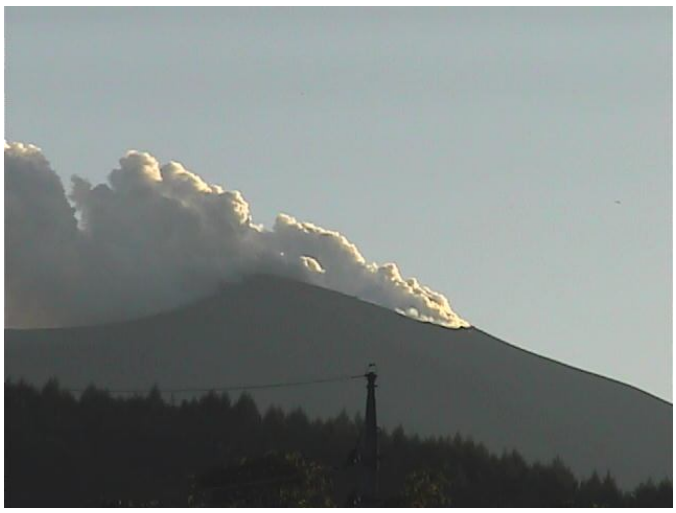


私の山荘は「長野原町北軽井沢」にあるが、降灰の影響があったと報じられている。



嬬恋（浅間山の北麓）では、実際に降灰があったことが、映像でも紹介されていた。降灰は、その後の雨であっという間に流されてしまうので、迅速な「採取」と「定面積秤量」が重要である。

気を付けなければいけないのは、「噴煙」と「噴気」のちがいだ。上の写真は普段の浅間山である。盛んに白煙を上げているが、これは固形物を含まない「噴気」である。したがって、噴火には相当しない。



これも相当にモクモクしていて、逆光で黒く見えるが、これも水蒸気・湯気・火山ガスの混合物の「噴気」で、噴火を起こしている状態ではない。